紫の上の魅力

――「らうたげ」「なまめかし」「たぐひなし」「めでたし」から――

三浦早織

はじめに

『源氏物語』には、藤壺の宮と紫の上という人物が登場する。藤壺の宮は先帝の姫君として生まれ桐壺帝の元に入内し、光源氏の憧れの女性として君臨し続ける。彼女は光源氏の理想の全てだといえる。紫の上は光源氏が病気療養のために訪れた北山で見つけた少女である。藤壺の宮の兄である兵部卿宮の娘で、藤壺の宮によく似ていた。光源氏は彼女を藤壺の宮の身代りとして引き取り、理想の女性に育て上げた。

本稿では、『源氏物語』の正編において二人に用いられている形容語から、紫の上が藤壺の宮の身代りとして機能していたのか、またどのようなところに魅力があったのかを明らかにしていく。

一、「らうたげ」

二人に共通して用いられている言葉に、「らうたげ」がある。『日本国語大辞典　第二版』には「いかにもかわいらしく見えるさま。可憐に見えるさま。あどけなげなさま。心ひかれていとおしく思われるようなさま。」(注1)と書かれている。二人が登場する場面でこの言葉が使われているのは以下の通りである。

藤壺の宮

①いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの……（「若紫」巻　二三二）

②世の中をいたう思しなやめる気色にて、のどかにながめ入りたまへる、いみじうらうたげなり。（「賢木」巻　一〇九）

紫の上

③つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。（「若紫」巻　二〇七）

④女君、ありつる花の露にぬれたる心地して添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼれるやうにして、……（「紅葉賀」巻　三三二）

⑤若の御ありさまや、とらうたく見たてまつりたまひて、日ひと日入りゐて慰めきこえたまへど、解けがたき御気色いとどらうたげなり。（「葵」巻　七二）

⑥この女君のいとらうたげにてあはれにうち頼みきこえたまへるをふり棄てむこといとかたし。（「賢木」巻　一一三）

⑦もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを、いとどありがたしと思ひきこえたまふ。（「若菜上」巻　六三）

⑧うちながめてものしたまふ色気、いみじくらうたげにをかし。（「若菜上」巻　六三）

⑨さすがに涙ぐみたまへるまみのいとらうたげに見ゆるに、……（「若菜上」巻　八五）

⑩色は真青に白くうつくしげに、透きらるやうに見ゆる御膚つきなど、世になくらうたげなり。（「若菜下」巻　二四四）

⑪来し方、あまりにほひ多くあざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを、限りなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたる気色、似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。（「御法」巻　五〇四）

ここから見えてくることは、藤壺の宮の「らうたげ」は登場してから早い場面で使用されているが、物語が進むにつれて使われなくなってゆくということである。これは、藤壺の宮が中宮となり、光源氏の手が届かない存在になっていくことで、「かわいらしい」と思える存在ではなくなっていくことを示していると考えられる。①で藤壺の宮に使われる「らうたげ」は、彼女が宮中を退出後に光源氏と逢瀬を交した時用いられている。これは単純に彼女をかわいらしいと感じたということが見て取れる。しかし②の例では、物思いに沈んだ藤壺の宮の様子に対して「らうたげ」を用い、「いたわしい」という感情の表現に使われている。ここから、藤壺の宮に対して「かわいらしい」という意味で用いられた「らうたげ」は、①のみとなる。

対して紫の上には登場から死に至るまで、物語の全体にわたってこの言葉が用いられている。③と⑤では、顔や表情が「かわいらしい」という意味である。④と⑤、⑧、⑨では、光源氏は紫の上から滲み出る雰囲気が「愛らしい・いじらしい」と感じている。⑩では、髪を洗ってすっきりとした後の彼女を見ての「らうたげ」であり、⑪で使われている「らうたげ」は、紫の上が病がちになり弱弱しくなった姿を見ての言葉である。以上、ほとんどの言葉に対して「かわいらしい」「いじらしい」という訳を当てることができる。このことから、紫の上に使われる「らうたげ」は、光源氏が彼女に対して持っている庇護の感情を、常に伴いながら用いられているといえるのではないだろうか。

以上をまとめると、光源氏は「若紫」巻の病によって宮中を退出している身である藤壺の宮に対して、男性として女性の彼女を守りたいという感情を持っていたのではないか。しかし、その後「賢木」巻以降では皇子を産み、後には中宮・女院という、揺るぎない地位を確立していった藤壺の宮に、光源氏は保護のような感情を持つことはなくなっていったのだと思われる。

一方紫の上は、彼自ら自邸に連れてきた女性である。心を許せる男性が近くにいない彼女にとって光源氏は安心して身を委ねることのできる、ただ一人の男性であるといえる。光源氏は紫の上に様々なことで頼られ、また多くの物事を教えてゆく。それはある種、兄妹のような、あるいは父と子のような関係性にあるといえるのではなか。ゆえに光源氏にとって紫の上は、藤壺の宮の身代わりとして、庇護の感情を持ち続ける対象となっていったのである。

二、「なまめかし」

続いて紫の上と藤壺の宮の両名に用いられている形容語として、「なまめかし」を取り上げたい。これは「優美である、上品である、もの柔らかである。」[注2]という意味である。二人に使われている場面は、以下である。

藤壺の宮

①外の方を見出だしたまへるかたはら目、言ひ知れずなまめかしう見ゆ。（「賢木」巻　一〇九）

紫の上

②わが御手にいとよく似て、いますこしなまめかしう女しきところ書き添へたまへり。（「賢木」巻　一一八）

③あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれど、……（「御法」巻　五〇四）

藤壺の宮に対して使われている「なまめかし」は一例である。ここでは光源氏が藤壺の宮の寝所に入ろうとして女房によって塗籠に押し込められたとき、のぞき見た彼女の横顔に対して優美さを感じているのである。つまりこの「なまめかし」は彼女のしぐさ・様子に対して使われているといえる。

それに対し、紫の上への使用例は二例ある。まず一つは、藤壺の宮と同じ「賢木」巻で、光源氏が雲林院に参籠して

いる最中、紫の上のことが気になり手紙を送りあう場面で使われている。光源氏は紫の上の文字が、自分の筆跡に似ていながらも、それに少し優美さが加わっていることを、「なまめかし」と述べている。ゆえにこれは紫の上の文字に対して使われているのである。続いて③での「なまめかし」を確認したい。こちらは紫の上が発病し、死期が近づいている場面で使われている。紫の上はすっかり痩せてしまいながらも、それにより気高さや優艶さがひときわ勝っていると感じられるのである。これは紛れもなく紫の上の様子に対して用いられている「なまめかし」である。

では「なまめかし」にはどのような意味があるのだろうか。『源氏物語の鑑賞と基礎知識』ではこの言葉について、

「生」は、未熟ではあるが若くみずみずしい新鮮な美しさをもつことを意味する。したがって「なまめかし」は、人の容姿・衣装・性情・態度などが優美・上品なことをいい、事物の優雅さや情景・風物の趣あるさまをもいうが、その美は、清新でみずみずしい美しさ、自然のままで巧まない美しさであることを基調とする。(注3)

と解説されている。ここから、藤壺の宮の例は、態度（様子）が、自然な美しさであることが分かる。藤壺の宮の場合は自分の境遇に苦しむ様子に対して使われているのであり、そこには巧まない美しさがあることを表現しているのではないだろうか。そして「御法」巻での紫の上は、病に苦しむ姿すら美しいと思われることに使われている。ゆえにこの「なまめかし」は、上品さや精神的に落ち着いている美しさを表しているのだと思われる。山本理氏はこの問題について、

「なまめかし」の対象となる人物には、けばけばしい華やかさ、力強さは見られず、年を取るに従って人間的にも幅を増し完成しつつある中に見えるほどしっとりとした洗練された美しさが、更に深みを増して、その人物を内面から支えているように思われる。(注4)

と述べている。これは光源氏の理想である藤壺の宮を表しているのではないだろうか。そしてそれは同時に、彼女の身代りとして見られている紫の上にも当てはまると考えられる。

また、山本氏は近接語にも注目しており、その中の一つに「あて」が含まれている。これは紫の上の③に当てはまる。これに関して氏は、

「なまめかし」美は「匂ひやか」「雄々し」「花やか」「すくよか」等の語と相反する性格を持ち、「あて」に通ずる優雅な振舞を表していると思われる。

理想美とされる「なまめかし」は、上品な高貴さをその根本的意義とする「あて」に同調され、更にその美を完成させるものであると考えられる。(注5)

と述べている。つまり紫の上のしっとりと滲み出る晩年の美しさは彼女独自の美しさであり、さらにそれは完成された理想美を伴っているものだといえる。

以上のことから、光源氏の理想である藤壺の宮の身代りとして存在していた紫の上は、晩年には彼女自身が独自の理想美を持つ人となるのである。これは、紫の上が藤壺の宮の身代りから脱却していることを表しているのではないだろうか。「なまめかし」美を持つ紫の上の美しさを、光源氏は当初藤壺の宮の身代わりの要素として見ていながらも、最後には彼女の完成した魅力として評価しているのである。

三、「たぐひなし」

本節では二人を賛美する言葉として共通して用いられる「たぐひなし」、およびその関連語に焦点を当ててみたい。これは「比較するものがない。」(注6)という意味である。この言葉が本文中で使われている部分を抜き出した。

藤壺の宮

①藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて……（「桐壺」巻　四九）

②同じ后と聞こゆる中にも、后腹の皇女、玉光りかかやきて、たぐひなき御おぼえにさへものしたまへば、……（「紅葉賀」巻　三四八）

③さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたぐひなくおぼえたまふに、……（「賢木」巻　一一〇）

④もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、言ふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、……（「朝顔」巻　四九二）

紫の上

⑤涙を紛らはしたまへるさま、なほここら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御ありさまなり。（「須磨」巻　一七三）

⑥御髪すまし、ひきつくろひておはする、たぐひあらじと見えたまへり。（「若菜上」巻　八七）

⑦なほたぐひなくこそはと見たまふ。（「若菜上」巻　八九）

⑧とりあつめ足らひたることは、まことにたぐひあらじとのみ思ひきこえたまへり。（「若菜下」巻　二〇五）

⑨なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、……（「御法」巻　五一〇）

藤壺の宮には「桐壺」巻から使われており、①は光源氏が彼女と出会って間もなく恋をした時に「この世に唯一のお方」という表現において用いられている。続く②は出産した後に初めて藤壺の宮が参内する場面であり、彼女の出自と美しさが相まって無類の寵愛を受けるということ、また他の人々も彼女の素晴らしさを評価していることが書かれている。③は、藤壺の宮が年を経るとともにより美しくなったさまを述べた後、光源氏が他とは比べものにならないほど愛おしく感じるという、想いを表現する「たぐひなし」である。④は藤壺の宮が亡くなった後、紫の上に自身が関わってきた女性達の評価を話している際、藤壺の宮を評した時に使われている。ここで光源氏は「ものやさしく鷹揚でいらっしゃるものの、深いたしなみがおありのところが」他に比類がない、と述べているのである。つまりこれは、藤壺の宮の人柄を賛美するために使われている「たぐひなし」なのである。

次に紫の上に用いられる「たぐひなし」をみてみる。少女時代の彼女に対して「たぐひなし」という言葉は使われて

いない。初めてこの言葉が登場するのは「須磨」巻の⑤の例である。光源氏との別れを嘆く場面で涙を見せまいとする紫の上の行動を見て、これまで出会った女性とは違うという印象を抱いている。つまりこれは彼女の行動に対する光源氏の感情である。続いてこの言葉が登場する場面は⑥で、明石の君や女三の宮と会うために身づくろいをする紫の上の姿を見て、またとないと感じている。故にこれは、誰かに会うために自身の容姿を気にする彼女の意識や自覚に対する「たぐひなし」である。次の⑦は、長年連れ添った紫の上を見て、もし普通の容姿だったらここまで心奪われることもなかっただろうと、紫の上の容姿の良さを褒めている言葉である。続く⑧では、光源氏は紫の上に対して「何もかも備わっている人」であるという評価をしている。そこには容姿と人柄の両方の評価が含まれていると考えられる。そして最後の「たぐひなし」は紫の上の死後に使われている。無類の美しさを持つ姿を見て、彼女の魂がその亡骸の中に留まってほしいと思っている場面である。ここで使われている「たぐひなし」は彼女の容姿に注目しながら、その実彼女の全てに対して使われているのである。

これらのことから、藤壺の宮に用いられる「たぐひなし」はその全てが彼女の素晴らしさを賛美しているものであるが、それらは恋をしている時における表現だとも考えられる。好きだからこそ他と比べものにならない、と述べているのではないか。しかし「朝顔」巻で初めて、思慕の情を抱く相手という理由ではなく、一人の女性として彼女を評価していることに注意したい。ここでは光源氏の主観的な意識ではなく、一種の客観性を含んで「たぐひなし」という評価をしているのだといえよう。ただしその思慕の情は出会いから死後まで続くものであったと思われる。高橋早苗氏はこの藤壺の宮への「たぐひなし」の使われ方について、彼女が光源氏にとって出会いから死別まで「たぐひなき」女性であったことを説明した上で、

「たぐひなし」もまた、そうした賛美表現の一つであることは確かなのだが、このように、藤壺思慕がはじめて語られる桐壺巻と、彼女の「御かはり」の少女の成長が語られる賢木巻と、亡き藤壺への哀悼が語られる朝顔巻という、いわば節目節目に配置されていることを看過してはならないだろう。「たぐひなし」は、いわゆる光源氏と藤壺の物語の始めと、そのとじ目に現れた表現として捉えうるものであり、藤壺への尽きせぬ思いを象るものとして

あるのだと言えよう。[注7]

と述べている。このことからも、光源氏の永遠の理想としての「たぐひなき」女性が藤壺の宮であることが分かる。

一方紫の上は、容姿に対する美しさを表現するために用いられている回数が多い。それ以外には行動を表すものなど、彼女への主観的な意識がほとんどではあるが、光源氏が複数の観点から彼女を見ていたことが分かる。しかし紫の上の場合、藤壺の宮に使われている例とは違い、紫の上の容姿や行動など物事に対して使われている場合が多く目につく。高橋氏は紫の上の「須磨」巻での「たぐひなし」について、

藤壺の場合は、「世にたぐひなし」、あるいは「たぐひなし」という表現のみで、いわば手放しの賛辞が贈られていたのに対して、この場面の「たぐひなし」は、「ここら見る中に」という表現を伴っていることである。須磨巻の紫の上に対する評価は、これまで逢った女君たちのなかではすばらしいというものなのであり、これは賛美表現ではあるものの、藤壺に対するそれと比べればやや限定された形で用いられている。[注8]

と述べている。しかしその人柄や美しさへの想いは、光源氏なりに彼女自身を優れている人だと評価している使われ方であろう。紫の上は藤壺の身代りとして光源氏に引き取られたが、紫の上個人に向けて「たぐひなし」という言葉が使われているのは、「若菜下」巻と「御法」巻の二つだと考えられる。この二つにおいて、紫の上は藤壺の宮の身代りではなく、彼女個人として光源氏に評価されている場面であると言えるのではないか。それまでの巻では彼女の「何か」に対して優れているという評価がなされてきたが、この二つでは「全て備わっている」「無類の」という内容となり、使われ方に限定性が見られなくなっている。そのため、光源氏は紫の上を身代わりという存在ではなく、一個人として見ているのではないかと考えられる。紫の上は、人柄を含めた全ての面で、光源氏の理想の女性として藤壺の宮に並ぶ存在となっていったのではないだろうか。高橋氏は「御かはり」という言葉に注目した上で、

「たぐひなし」という形容表現は、紫の上が光源氏にとって単なる「御かはり」にとどまらぬ女君として位置付けられていく、その過程を示すものなのだと言える。

藤壺を「たぐひなき」女性として思慕していた光源氏は、その「ゆかり」である紫の上をもついに「たぐひなし」

と認識するのであり、紫の上が藤壺の「御かはり」としての存在から、かけがえのない絶対的な存在になりえたことが、「たぐひなし」という形容表現によって跡付けられるのである。(注9)

と述べている。

以上をまとめると、光源氏は思慕の情を抱く藤壺の宮に対して、「たぐひなし」という言葉で彼女への理想を表現していたといえる。そしてこの語は彼女の身代りとして迎えられた紫の上には、始めのうちは行為に伴って使われていた。しかし後には光源氏の中で、彼女の比類のなさを表現するために用いられた。これにより紫の上は身代わりとして機能しながらも、結果的には彼女個人としてその評価を得たと考えられるのである。

四、「めでたし」

『源氏物語』に多く登場する形容語の一つといえるものに「めでたし」がある。意味は「見た目に魅力的な状態で、ほめたたえるに値する。立派である。見事である。結構である。すばらしい。」(注10)などがある。そしてこの言葉は、他の形容語と一緒に使われることの多い言葉でもある。二人に用いられている部分は以下の通りである。

藤壺の宮

①人の御際まさりて思ひなしめでたく、……（「桐壺」巻　四三）

②すこしふくらかになりたまひて、うちなやみ面痩せたまへる、はた、げに似るものなくめでたし。（「若紫」巻　二三四）

③なつかしうめでたき御けはひの昔に変らぬに、……（「須磨」巻　一七九）

④入道の宮の御琴の音をただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、いまめかしうあなめでたと聞く人の心ゆきて、容貌さへ思ひやらるることは、げにいと限りなき御琴の音なり。……（「明石」巻　二六六）

紫の上

⑤幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。（「若紫」巻　二〇八）

⑥いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかかりたるをかき撫でて、……（「紅葉賀」巻　三三三）

⑦物に書きつけておはするさま、らうらうじきものから若うをかしきを、めでたしと思す。（「葵」巻　二八）

⑧姫君の何ごともあらまほしうととのひはてて、いとめでたうのみ見えたまふを、……（「葵」巻　六九）

⑨いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、ところせかりし御髪のすこしへがれたるしもいみじうめでたきを、……（「明石」巻　二七二）

⑩外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。（「朝顔」巻　四九四）

⑪またいと気高う盛りなる御けしきを、かたみにめでたしと見て、……（「藤裏葉」巻　四五一）

⑫御手などのいとめでたきを、院御覧じて、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに、……（「若菜上」巻　七六）

⑬はなやかにいまめかしくにほひ、なまめきたるさまざまのかをりも取りあつめ、めでたき盛りに見えたまふ。去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへるを、いかでかくしもありけむと思す。（「若菜上」巻　八九）

⑭あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれど、……（「御法」巻　五〇四）

⑮飽かずうつくしげにめでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさに、……（「御法」巻　五〇九）

この二人に使われている「めでたし」を、容姿に関するもの・人柄を表しているもの・その他を表現するために用いているものに分けてみた。

まず藤壺の宮では、①は、「彼女の身分も高く、そのためかとても立派にみえる」の意であり、その他を表すものに当てはまるのだといえる。②は少しふっくらとしながらも、悩みから面やつれしている彼女が美しいといっているので容姿を表している。続く③の「めでたし」は心惹かれる魅力は昔と変わらないということなので、人柄とする。④は彼女が弾く琴の音が見事であり、またその容姿を思い出させる音だとも述べられているため、ここでは容姿とその他の両方にかかっているものだといえる。

では次に紫の上に用いられている「めでたし」を確認していく。⑤は光源氏が初めて紫の上を見た場面であり、ここでは彼女の豊かな髪の毛が見事だと述べている。そのため容姿に関するものと言える。続く⑥も髪の豊かさを述べているため、容姿を表している。⑦の例は紙に書いている姿をすばらしい人だと思う場面であるため、これは人柄に関するものといえる。⑧は紫の上がすっかり成長して、「じつに見事な有様」になっていることを述べている部分であることから、これは容姿を表しているといえる。⑨は明石から都へ帰った光源氏を迎えた紫の上の、より美しくなった容姿を表す「めでたし」である。⑩は光源氏が紫の上を見て思う「めでたし」である。藤壺の宮かと思うほど似ていることを表しているため、これは容姿を表しているといえる。⑪は明石の君が紫の上を見て思う「めでたし」である。初めて対面した紫の上に対して持った印象であり、これは容姿を表している。⑫は朱雀帝が紫の上と手紙でやり取りをした時の、紫の上の字をみた朱雀院の評価である。これは対象が文字であるため、その他に分類する。⑬は光源氏が長年連れ添った紫の上を見て、改めて彼女の美しさに感動する場面である。これは容姿と人柄の両方を表しているとしたい。⑭の例は紫の上の死の間際、光源氏が彼女をみて、昔の美しかったころと、現在の弱っている中にある美しさを対比して想っている場面である。これはまぎれもなく容姿を表しているといえる。最後の⑮は、紫の上が亡くなった後の言葉である。死顔を見つめながら、どこまでも美しいと思っている。これも容姿を表していると考えられる。

これらのように一つ一つを見て見ると、藤壺の宮が、まずその容姿の面において、光源氏の中に一つの理想形として確立されていることが推察される。続く③において須磨に下向する彼が挨拶に訪れた場面でも、彼女が理想として光源氏の中にあり続けていること、またその状態が続いていっていることがわかる。

対して紫の上は、⑤と⑥と⑨が成長していく容姿、また特に髪の毛に関することに触れながら使われていることがわかる。そしてここで特に注目したいのが⑩の例である。これは光源氏が紫の上のふとした瞬間に、亡くなった藤壺の宮の面影を見出す場面である。また、ここで髪以外の容姿に関して「めでたし」を用いていることにも注意しておきたい。藤壺の宮が亡くなっていることを踏まえて考えると、今までの紫の上は光源氏にとって、身近に置いておける身代わりであったが、ここからは現実には存在しない人の身代りとして見られ始めている、と言えるのではないだろうか。そうすることで、さらに光源氏の中で紫の上の存在価値が上がったと考えられる。北川真理氏は紫の上の理想性という点から、この「めでたし」を、

二条院の紫上のもとを久方振りに訪れた光源氏が、紫上の容姿の中に藤壺の面影を見出して紫上に対する愛情を確認している場面で用いられている「めでたし」である。光源氏は、紫上の中に藤壺を見ることによってはじめて理想的女性として紫上を、彼を取り巻く女性達の第一位においているのである。[注11]

と述べている。このことからも、光源氏は藤壺の宮の死後、本格的に紫の上の中に藤壺の宮を見つけることを重視していると言えるのではないだろうか。面影など、目に見える点から身代わりとなるか判断されており、紫の上は藤壺の宮の身代わりとして機能していることが分かる。

続く⑪では、紫の上に対して「めでたし」と思っている人物が明石の君であることと、⑫では文字を通して紫の上を「めでたし」と思っているのが朱雀院であることに注意したい。ここで初めて光源氏以外の人から魅力的だと言われているため、紫の上自身の魅力というものが充分にあるということがわかる。この点において北川氏も、

藤壺の存在とは関わりをもたない人々にも認められる理想美を有する人間として紫の上は描き出されている。[注12]

と述べている。事実、⑮の例にもある通り、紫の上の死後は夕霧も彼女を見て「めでたし」と言っている。この点から、紫の上は光源氏以外の人間の目を通しても、魅力的な人間であったのだということが分かる。

また身代わりという点でもう一つ注意しておきたいことは⑬の例にある通り、「若菜上」巻で光源氏が紫の上個人の魅力を「めでたし」を用いて述べているということである。この言葉は確実に紫の上個人に向けられており、それは身

代わりとしての紫の上ではないことに注目したい。この心ひかれる相手が紫の上であることは、光源氏が紫の上自身に魅力を感じているのだと言える。ここから光源氏がこの場面の「めでたし」において、紫の上を通した藤壺の宮ではなく、紫の上本人の魅力を評価しているのだと言えよう。

以上をまとめると、光源氏は「めでたし」という言葉において、藤壺の宮への思慕の情を抱き続けていたことが分かる。そして藤壺の宮の死後、彼女への思慕の情は身代わりとしての機能を果たしている紫の上へと引き継がれていった。しかし、同時に光源氏は「めでたし」の表すものが紫の上個人の魅力であることに気付く。彼は「めでたし」という言葉を用いて、彼女への評価をしているのだと考えられる。

まとめ

藤壺の宮と紫の上に共通して用いられている形容語を見ると、藤壺の宮には全体的に彼女の全てを賛美している表現の仕方が多いといえる。対して若き日の紫の上は用い方に限定性がみられるなど、まだまだ彼女の全てではなく側面の一つを評価しているという使い方が多い。しかし同じ言葉が使われていることから、光源氏は紫の上から藤壺の宮に似ている点を多く見出し評価していたといえる。それは結果的に藤壺の宮の身代わりとしての価値を紫の上の中に見ていたといえるのではないだろうか。しかし、藤壺の宮の死後は紫の上のみを見るようになり、彼女に用いられる形容語の使い方が藤壺の宮にそれ近づいてきている。これは藤壺の宮だけではなく、紫の上自身も光源氏の理想像として存在し始め、紫の上個人としての価値を高めた結果であるといえる。それが彼女を、完成された理想美を有する存在とするに至ったのだと考えられる。これにより紫の上は、藤壺の宮の身代わりという存在から脱却し、光源氏から評価されるようになったのである。

【注】

（1）『日本国語大辞典　第二版』（小学館）

（2）注（1）に同じ。

（3）『源氏物語の鑑賞と基礎知識　桐壷』（至文堂、一九九八年一〇月）

（4）山本理著「『源氏物語』における「なまめかし」」（『愛知淑徳大学国語国文』第一六巻、一九九三年三月）

（5）注（4）に同じ。

（6）注（1）に同じ。

（7）高橋早苗著「『源氏物語』の「たぐひなし」―紫のゆかりの女君たちをめぐって―」（『中古文学』第九〇号、二〇一二年一一月）

（8）注（7）に同じ。

（9）注（7）に同じ。

（10）注（1）に同じ。

（11）北川真理著「紫の上の理想性：形容語をめぐって」（『学芸国語国文学』第一三巻、一九七七年二月）

（12）注（11）に同じ。